


諸國  
奇談

東遊記  
一

ル 3  
475  
1





此の書は...  
醫方... 橋... 著  
述...  
元... 宣... 一...  
七...  
六...  


東西遊記序

石川別駕橋君以攻醫漫遊四方足  
跡殆遍天下其所記載率皆修治之  
案經驗之方而政有嘉績則必咨焉  
人有卓行則必訪焉及登名山覽古  
蹟歷問殊俗搜采異聞者數十卷

門名  
號  
卷





名曰東西遊記好事家往傳誦之  
至有謄寫而藏以爲帳中之祕者  
書賈因屢請刻君終弗肯久之一日  
俄語余曰此書之行非吾意也何者  
蓋家業著述猶未脫稿者居多而  
首用兔園冊災木恐致有識之誚而

會坊間射利之徒有謀私刻於是不  
獲已遂授剗剗將奈之何盍爲吾  
書一言以弁於卷端余乃竊謂曰夫  
攜君爲人志於道勵於行旁好唐  
詩及國風考鐘律試星度其爲  
醫也固亦隱乎小伎爾而况此書就



其中特又緒餘者乎然善讀是編者可以興起感發秉彝之良心則是還元氣也破井蛙之見釋夏蟲之疑則是起沈痼也其醫人之效亦捷矣不必事於刀圭間此豈與世之紀游蔓詞彌文徒資風月之談供觴

咏之具而已者可同日而語也哉君其勿多讓焉是為序

寬政乙卯歲秋八月

愚山松本慎













○小杉之感 南嶽画

○名立山崩

○采山

○九十九橋 福居竹堂画

○塩竈

三之卷

○文武之餘風

○正木劔術 長澤堂画

○丹後之人

○幸之神

○蜃氣樓 吉村蘭洲画

○佐渡之渡

四之卷

○親不知 日輪

○義經之笈

○胡沙吹 吳月溪画

○藤樹先生

○阿古屋松 圓山應受画

五之卷

○秋田落

○朱谷

○化石溪

○浮嶋 吉村孝敬画

○大骨

○金華山 法眼東洋画

○七不思議

五之卷 未

○平泉 浅井義篤画

○三尊窟 村上東洲画



○不食病

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

東遊記卷之一

鎌倉

播南谿子著

鎌倉の東武通の入りたる所を以て路に  
從て又去りて其地は昔の傍山川別々の  
神社佛閣は妙なり情乃情一たに先靈岡の  
八幡宮は其の壯麗馬山ははげしく佛寺も  
多し長ちちと最又刺なり吾等南面のまき  
とみれば大なるいづのまあり昔は宮の別處に  
將軍實朝公被殺しつゝ亦なりと云八幡文の心







幸も微くかゝるるゆゑに源金といへども今に四ふたの  
 大名の城下程にも多き幸と号する凡源金を馬山七  
 多く大河七多く要害の地ともいへり一は只小き山敷  
 里に方に連つて波濤のこゝに其間の谷も七多きゆゑ  
 亦晴るる平地を絶てたり但源氏に山敷ある地は  
 一は源氏の都一は山敷一は伊豫守松平頼朝守府將  
 軍に柱一安倍の責任征伐の爲に東國より河石清水  
 八幡宮にて地を初清し終ふ其後三河押さるるに源  
 金に下向ありて世に源氏義家出生し終ふと云やかく

先祖由來のある地ゆゑに源金と名付し初め  
 大藏符源足公麻鳴系指の付けた地は由井の濱に皆  
 夜霊まよふと云ふ秘記ありし源と苗所  
 大藏山に松岡に埋まふゆゑに源金と名付し又大  
 藏山茂源倉山とも名付し其外神社佛圖甚多  
 く古語曰源種くは名あるふと云ふと云ふあり  
 今にいはばあつた余も二三日も山敷も遠角一と云  
 又過り寺社の日記などとも一見せば面白き事も多  
 へきに只戸塚より入るるありて其日源金茂源に



一見し遊よ江流一物ぬきバゆめいしゆ七がくす(残)  
了らぬおま多し

竹根化輝

越之助府中の南二里よ栗田郡といふ所ありゆ余ふ  
がう所作りまうてけ遠まその地なる里之古昔継體  
天皇大御神は皇子とて降しせまひし時世亦よ御  
あるし地地名と大詠初といひしと後世あなま  
いし誤りしよまゆけ下よ粟生とていふ寺あり天皇  
宗よて坂本西教寺は末ちよて願ふ大地にけ寺乃

住持ハ余々方外の新名ゆえ北地乃時七たり半迄  
廿のせよ前年け津なろし一はけ寺の山面よある  
地地開くくありし竹の根ししし輝よ豊地  
し既よ生れ伝りし初揺しし早地上よか  
かきしししもありいしよまゆけ下よ粟生とていふ  
うりまももあつ色くつりしを教百く及り初  
小僧奴僕たもも路ししかまししあゆりまもも  
流まのりしやけししもがく住持ハけ教と実せん  
し心輝まもも又まもも輝し輝よ化せし先んせし











西國の居所を跡吉平を年ふあつたやうに馬交を  
 書から作者の仙基は人々佐久河洞敷とて身保  
 時分の人の名成義和字と子歳太白山人と号し但  
 彼がどの知音を子ハ今に仙基の傳友とて姓と新井  
 と改名を彦四郎と移し名成義賢字と子故滄洲  
 と号し齡脱し七十牛の右の古字をたるとはあはれ  
 こと多しは他邦を去る書の名とてはけりあつた人  
 一平ハ仙基の士奥田並助とて人の家を一男一子  
 小至人といふとて年主郡の白本を去るをたると一部

書字一と傍よりと何とせしむるは先と書き去る彼府  
 の里より一と傍よりと何とせしむるは先と書き去る彼府  
 一りたふ入る下は其古跡あり菅薦も今ハ名のとて  
 あり

吹浦砂磧

二月廿二日如羽國酒田成軒とて起りて吹浦といふ  
 里とて一と傍よりと何とせしむるは先と書き去る彼府  
 又田畑もて之に大海右ハ鳥海山とて一と傍よりと何とせしむるは先と書き去る彼府  
 一りたふ入る下は其古跡あり菅薦も今ハ名のとて



建ふ所もや其方之五十間程つゝは柱と建て通乃  
 目下とせり酒田より一二里も其ありんこふは  
 山風強く吹起り沙の塵起るるおどろきし初乃  
 福も波平とたふらし又も人馬の足跡あり  
 草鞋馬は皆ぶらぶらある方へ通をりやきし  
 風吹けのりく沙は吹起るるを天竺も去るあり  
 目下の柱乃見えざるのそり我らも亦後ひき  
 さへ見えりしはまた多と合せて接して行程  
 後も亦後とたふらしまた柱のそり語を尋ん



應瑞



人も多くあつたまゝにひそくせんといふまゝに  
 思ふにびくみどりよけはひふらふらふるふらふ建ひ  
 んもそらうとごうとつらまはれまはれまはれまはれ  
 といつてかたつとも風沙社と名乗るすなはて世に  
 知れぬといひはれぬと又やうくもさうらふ  
 小なりおびいふてんとおひいさぐさおあうらふ  
 やアんがやあうらんとまゝにまゝにまゝにまゝに  
 小の雨降中りるおれまをうよ沙まづまの平に  
 もアえ出られ晴したる陽とまゝにまゝにまゝに  
 風沙社

小の雨降中りるおれまをうよ沙まづまの平に  
 もアえ出られ晴したる陽とまゝにまゝにまゝに  
 風沙社  
 小の雨降中りるおれまをうよ沙まづまの平に  
 もアえ出られ晴したる陽とまゝにまゝにまゝに  
 風沙社  
 小の雨降中りるおれまをうよ沙まづまの平に  
 もアえ出られ晴したる陽とまゝにまゝにまゝに  
 風沙社



二月末まで一日も風吹きもせずおしく海塵常に  
 天と雲の間に詩よつる山風初地よかきる景をなす  
 ん其吹ちりす沙風の吹也しよりしあふ吹たり  
 或ハ地乃くく塚のくく月よ其形愛がくく山地乃  
 草木も皆秋の末より其れ末までまき葉ハなく  
 海ハも砂漠ハ百草汁風ハ初く俣ハの塞ハ沙漠  
 の中作まる詩よふふよりし遠ハは事ハ山極地  
 残出るく四十度よああつて塞北の地ハくくハ  
 けり風をのお細くも情ハふたぐど日本のおら

二月末まで一日も及さうしが昔より山地ハ  
 人々皆夏むらりすハ草木も皆く風ハ南風  
 けり海はくものどくちをハ忍ろし我々もさる  
 中とそ何我ハ地ハありしき九月より二月の地ハ  
 ハ途中より藤人ハ終てはさるし家路ハ  
 醫術修けしをまじハ格ハの事ハ只今よの  
 探しんよのふし人ハ必四月以後ハけきふ也

蘇武社

白羽園秋田の城下より北東に海申へく出する地也



東国言 卷一  
了きく申先い孫山のてり先と男麻山といふ櫻の住  
吉の浦より陸路も水もいへばは同一出羽國  
の門付支杉の木多く世よは秋田杉といふは山より  
出るといふ風景も依り吳のてり真中より萬雀の岩  
倉なるの奇ハ世よの人も知るふたると世男麻山の中  
赤神山といふありけ山よにあり所の神五座内一つを  
漢の武帝とせり一つを蘇武とせり外の之社ハ我邦  
の神なりと云け地の海命いいぬ奴の地よりて蘇武が牧

羊ハけ男麻山といふ一つの流よりいひあることよや  
うせど流より一と相より附會せ流たよりけ  
の風土氣候もよる蘇武が羊もよもありあんと  
いふやうに思ゆる夏の休も秋田溪野代迄乃人  
船もよありて廻りよとてけ山乃蘇武とすりつる  
の奇境と探るるありとておかしきとありて七  
風波あるをいふあり難きおなり又庄内と秋田の  
の境も女麻といふおをけり男麻といふお海  
る中二三十里あり男麻女麻といふとも中



あるところのうへに彼玉の人形をとり扱け男原山の  
肉より、その一の手鏡とりふも葛雀の岩屋あり  
山乃禁海海面ふとき、正に洞あり八月の既海潮  
きたりおぼしめし又合せの潮洞穴より及ぶる時  
絶壁より入りしるし潮島くは洞より及ぶる時  
あり暫く洞穴の中へ入ると入りしるし潮島く  
了自無と洞の中へ入りしるし潮島く  
あり、あつとくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
入るにたすは洞穴廣く細くある砂はくくくくくく

て後より海もあつて陸地より入りしるし潮島く  
天地のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
人象のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
その砂地はあつて人より入りしるし潮島く  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
く先もおぼしめしるし潮島く  
又系控はあつて人より入りしるし潮島く  
くかゝるあつとくくくくくくくくくくくくくくくくく  
あつとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく



遠山も人家も別の世界の如くある。次男原山の内々  
又ハ秋田迄行かざればとてさてもうかえさるるを  
山の邊に居るに又別な山ありしは新増地  
境もさてもあるんとす我れは八月の夜に  
ハけ洞中へ入り又さうしてと妙多し

埋木

仙居のさうして一里中も名取川あり名取郡に流  
るるさき名取川と名取甚大の河なり桂川小川  
仙居より遠るや時名取川とてとてハけハ埋木

あやふると存おしよさうとておまの傍り  
岩根と見え、後より百年二百年のあついと  
岩根よりおしおまのやうなるもの、根よりのやと  
おまのやうなるもの、埋木さうなるものの中あり  
、行のあつとさうなる探りよし、奥田並浦といふ  
人あり家ありて、文字に「奥田並浦」といふ  
とて、金の結をよして井の川のやうと掘り、民と  
掘り、又ハ掘り、おまのやうと掘り、おまのやう  
の助け小なり、おまのやうと掘り、おまのやう



新渠の碑ありて教をうけて皆人の知る事なり  
 け奥田氏名取川の堤と爲りて田作の水鏡と爲  
 一町川なる處より地涼く橋出せしはありて  
 親しくうらむに橋入るるは是れ也若くは川の堤  
 ありしものもよき也若くは橋の石は紙  
 石に実小石ありて是れ也其の石は  
 年々経るるに石は石と爲りて石は石と  
 是れ也其の石は石と爲りて石は石と  
 の中より石ありて石は石と爲りて石は石と

本理ありて其の石は石と爲りて石は石と  
 付くぬる埋まらぬと云ふは是れ也其の石は  
 かく例の腰ありて石は石と爲りて石は石と  
 細くありて石は石と爲りて石は石と  
 幸ふ左ありて石は石と爲りて石は石と  
 の一りて石は石と爲りて石は石と  
 ありて石は石と爲りて石は石と  
 熊突

加賀越中より母に名をうけたるは熊突の石と云ふは熊突の



とも付違ふらむと極とのおとをむ余哉申す存  
 ありし時空深境の山中の人よ物なき熊と云ふ  
 とけよそ極者も亦雪極かりり雪亦あり雪厚  
 積る時無雪窟に入ると位む其時極者とも新  
 本と名のおちりて無の位る穴は井一投入るに  
 無雪のく其雪影とくくろのく探やる極小穴乃  
 奥の方以ては身りて其無雪窟よ穴の口の方  
 一出はいま穴はつ所りて無雪の外一ある時  
 さらる斗のる陰とく月海のありと極る

素狗画





實しく... 諸君の御覧を...

實しく... 諸君の御覧を... 此の... 實しく... 諸君の御覧を...

やうく... 諸君の御覧を... 此の... 實しく... 諸君の御覧を...



云々集石

予、越前守敷屋平河守一良之十日の初なり  
 一が例として暖くして北園かうして小春の  
 ありしときお続き天氣もくううあまの被地乃  
 人こよいそちなりと其地うう人のまをわりの成  
 するよまうりぬ敷かた所と新島西の方に出ま  
 きしとへある松ありは松一夜松ありふむう  
 神功皇后の御時唐おらる賊ぬ多く驚ひあり  
 一よけ海濱に此松一枚のらふ小生ひかく櫓

ゆるり多くしき集りて一は歌乃日あり  
 鳥の雛を左物と見えく驚いたるを逃去まると  
 いひ傳ふは小松のまをうら真砂の白きをぬ小  
 圃うも隠れお土地ありまうりあす丁斗を常宮  
 うらふあり入海成園て敷屋の町に向い合ま  
 まは南ありて北地を風景好し福をけあうあ  
 人の松奥の西あり宮は神哀天皇とあまらる大社  
 から松のうら人がどけふと経歴の時も此社へ宿  
 づりしときあまらるうり遊行上人代奉納の松号



かくもろけの... 山あり... 窟... 二平八丁... 人... 已... 数... 若... 二間横... 基... 同...

へ... け... 物... 驚... 其... 杯... 了... 不... 一...



歌(うた)もく(もく)し(し)ね(ね)も(も)し(し)し(し) 藤(ふじ)宿(しゆく)の(の)海(うみ)の(の)ぬ(ぬ)

甲(か)田(で)堂(だう)

奥(おく)州(しゅう)白(しろ)石(いし)の(の)城(しろ)下(した)より(より)ま(ま)甲(か)子(し)南(なん)の(の)支(し)川(がわ)より(より)小(こ)澤(さわ)  
あり(あり)け(け)支(し)川(がわ)の(の)所(ところ)末(すえ)より(より)福(ふく)寺(じ)より(より)小(こ)さ(さ)あり(あり)奥(おく)州(しゅう)の(の)館(くわん)を(を)  
年(とし)の(の)凶(きゅう)作(さく)より(より)け(け)も(も)大(だい)破(ぱ)より(より)及(およ)び(び)住(すま)持(ぢ)より(より)あり(あり)て(て)も(も)食(た)ね(ね)也(なり)  
之(こゝろ)より(より)僧(そう)も(も)不(ふ)任(にん)明(めい)き(き)さ(さ)と(と)あり(あり)奉(ほう)さ(さ)む(む)に(に)何(なに)の(の)  
一(ひと)つ(つ)の(の)池(いけ)より(より)ま(ま)や(や)寺(じ)より(より)ま(ま)ま(ま)ま(ま)屋(や)の(の)傍(そば)に(に)極(ごく)小(こ)の(の)板(いた)東(とう)の(の)  
も(も)み(み)う(う)く(く)つ(つ)み(み)り(り)あり(あり)け(け)も(も)中(ちゆう)より(より)又(また)一(ひと)つ(つ)の(の)小(こ)堂(だう)あり(あり)信(しん)  
は(は)甲(か)田(で)堂(だう)より(より)小(こ)堂(だう)の(の)書(か)付(つ)け(け)中(ちゆう)より(より)故(こ)將(しょう)堂(だう)より(より)あり(あり)大(だい)

き(き)繼(ついで)より(より)二(に)間(ま)の(の)斗(と)の(の)小(こ)堂(だう)に(に)奉(ほう)尊(そん)ぶ(ぶ)に(に)右(みぎ)の(の)く(く)く(く)な  
ま(ま)い(い)け(け)小(こ)堂(だう)の(の)破(ぱ)換(か)へ(へ)り(り)の(の)ま(ま)ま(ま)も(も)ち(ち)ま(ま)く(く)や(や)り(り)く(く)る(る)極(ごく)よ  
あ(あ)が(が)り(り)又(また)も(も)に(に)内(うち)より(より)佛(ほとけ)より(より)七(なな)き(き)く(く)只(ただ)佛(ほとけ)人(にん)の(の)甲(か)田(で)堂(だう)  
下(した)長(なが)刀(やいば)も(も)持(もち)て(て)る(る)本(ほん)像(ざう)二(に)つ(つ)と(と)母(はは)を(を)ま(ま)せ(せ)り(り)い(い)ま(ま)る(る)人(にん)の(の)像(ざう)  
よ(よ)か(か)ら(ら)る(る)も(も)佐(さ)者(しや)次(じ)信(しん)忠(ちゆう)に(に)二(に)人(にん)の(の)妻(つま)あり(あり)と(と)も(も)其(その)音(ね)  
義(ぎ)經(ぎやう)孫(そん)會(かい)殿(てん)の(の)氏(うぢ)共(ども)と(と)あ(あ)げ(げ)あり(あり)と(と)少(せう)末(まつ)衛(ゑ)より(より)  
は(は)も(も)一(ひと)つ(つ)の(の)孫(そん)會(かい)へ(へ)趣(おもむ)き(き)あり(あり)時(とき)佐(さ)者(しや)屋(や)目(め)秋(あき)子(こ)の(の)次(じ)信(しん)  
忠(ちゆう)信(しん)故(こ)の(の)供(くわん)め(め)お(お)せ(せ)り(り)平(へい)及(およ)義(ぎ)經(ぎやう)之(これ)部(ぶ)一(ひと)つ(つ)の(の)切(き)り(り)平(へい)  
家(け)と(と)追(お)追(お)追(お)一(ひと)の(の)谷(や)八(や)つ(つ)た(た)を(を)ど(ど)も(も)さ(さ)ん(ん)た(た)ら(ら)る(る)の(の)大(だい)切(き)り(り)



だうおいて身度奥州へあつたひつ時を先づ  
 懐いて出たりし志井片岡がはるまじ事し  
 場いせしは次信を八尋りし能登の矢先よか  
 子忠信ハ京都より義の高へ来てし兄弟三人  
 とも作國の至りし形息のそりしと母なる人  
 うかしく歎きてきりしゆりある人かえりし  
 てせえて一人たりし人々のゆくゆりたふさ  
 ぼ洗しぬると兄弟の妻女甚を根と推し我が  
 丈の甲冑とえしきりし編だきしむりげし出

立身の兄あり凱陳せし其徳とまの老母を  
 せ其忠とたふし先し其後の人七二人の婦  
 人の孝心ありしよしや甚と本條の刻  
 しくおしきりし時身兄弟の人古きなり  
 しく亦た忠義義勇乃今其人は是れし婦  
 人又希代の孝女とて夫婦忠孝の徳とて七世  
 まで傳へしきりし余州物産の徳とて本條の  
 てもにきりし流しは流しせりかたし人の徳もな  
 るべき孝婦の徳なりかたしきりし山雲の雨風



といふに路たうきく彩色もあまき僧だまきく  
 香花と供する人もきく年月もあまきほひふ  
 ちねくもたうきくありきくききのも年とも許り  
 る人もあまきくしと許ありくありきとりし一  
 のまおとに供する人もきき世も忠孝も感  
 る人もあまきくあまきくあまきくはりきききき  
 安きききききききききききききききききき

東遊記卷之一終



